調査区８

江戸期の地表面を確認しました。地表面は北側に向かって緩やかに下がっています。排水にかかわる遺構がみつからなかったため、調査区４からの排水経路の続きはわかりませんでした。

写真 13　調査区８全景（南から）
左の段が江戸期の地表面。

調査区９（荒和布櫓石垣）

江戸期の地表面と荒和布櫓石垣の基部を確認しました。荒和布櫓石垣基底部は、盛土の上に薄く平らな石を敷き、その上に根石を据えるという構造であることがわかりました。

また、石垣基底部から 1.5m ほど掘削しましたが、地山が確認できなかったので、築城以前のこの部分は、谷あるいは急斜面の地形であった可能性があります。

写真 14　調査区９荒和布櫓石垣基底部（南東から）
上段が江戸期の地表面、中段が石垣基底部構築時の整地面、その下は造成時の盛土が続く。

腰巻櫓の説明板を設置しました。

腰巻櫓は、裏鉄門南側にあります。明治 23 年（1890）に櫓ののる石垣が崩落しましたが、このことが津山城の保存に向けた取り組みのきっかけとなりました。

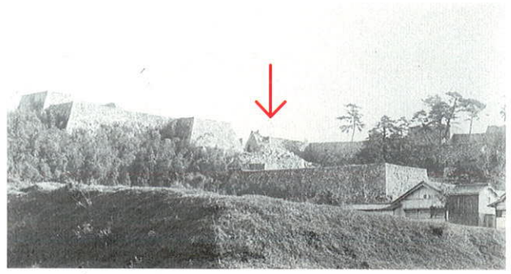

写真 15　明治 23 年に崩落した腰巻櫓石垣（赤矢印）

昨年度の整備事業で崩落前の腰巻櫓石垣の遺構表示を行っており、今年度は腰巻櫓と石垣についての説明板を設置しました。

写真 16　現在の腰巻櫓石垣（赤矢印）

写真 17　腰巻櫓説明板設置後

今回の調査により、裏中門から裏下門下雁木までの排水経路が明らかとなりました。調査区８で排水遺構が確認できなかったので、排水経路は裏下門下雁木から、西方向に直進せず、北へ折れる可能性があります。

また、通路周辺の江戸期の地表面や、石垣の基底部構造、肘櫓東の塀の雁木等の遺構が確認できました。

今後は、これらの調査成果を活かして、引き続き通路の整備を進めていきたいと思います。

津山城だより No.22 2018年3月
TSUYAMAJODAYORI
津山市教育委員会 文化課

発行年月日	平成 30 年 3 月 31 日
編集・発行	津山市教育委員会文化課 〒 708-0824 岡山県津山市沼 600-1 ＴＥＬ　（0868）24 － 8413
印　　刷	（有）弘文社

津山城だより
TSUYAMAJODAYORI
No.22 2018年3月
津山市教育委員会 文化課

裏中門・裏下門周辺の発掘調査を実施しました。

写真１　調査区６で発掘された土塀の雁木と石組み水路のオルソ写真（南から）

史跡津山城跡保存整備事業では、現在通路部分を中心に整備を進めています。整備工事に先立ち、通路とその周辺部の発掘調査を行っています。

平成 29 年度は、搦手側の裏中門周辺、裏下門周辺の発掘調査を行いました。発掘調査により、築城の際の造成の状況や、江戸期の地表面、排水経路等を明らかにすることができました。

整備では、昨年度整備を行った腰巻櫓石垣の遺構表示部分に説明板を設置しました。

今回は、これらの事業概要を中心に紹介します。

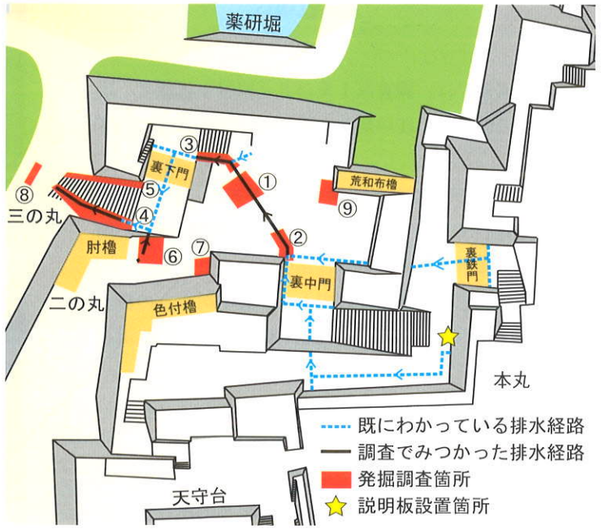

図１　発掘調査位置と整備位置

調査の目的

今後の整備工事に先立ち、江戸期の地面の高さや遺構の有無の確認を目的として通路の周辺部分の発掘調査を行いました。また、通路の整備に合わせて、江戸期の排水路を再利用した排水路整備も行っているため、江戸期の排水経路を確認することも目的としています。調査区は裏中門から裏下門にかけて９か所設定しました。

調査概要

調査区１、２

現在の水路の直下から江戸期の水路がみつかりました（写真２～４）。水路は後世に破壊されており、大部分は底部付近のみが残っている状態です。水路の埋土中や調査区の周辺から豊島石製排水溝の破片がみつかっているため、江戸期は豊島石製暗渠排水溝でしたが、後世に排水溝が抜き取られた可能性があります。

写真２　調査区１全景（北東から）
石組みの水路が現在の水路で、青線が江戸期の水路。

写真３　調査区２拡張区全景（東から）
青線が江戸期の水路。

写真４　調査区２全景（北東から）
青線が江戸期の水路。奥側は後世の破壊により、溝側面がほとんど残っていない。

調査区３

調査区東側では、調査区１及び２と同様な状態で、現在の水路の直下に、江戸期の水路がみつかりました（写真５）。

調査区西端では、裏下門の雨落ち溝が雁木（石の階段）の中まで延びていることを確認しました（写真６）。雨落ち溝は、裏中門からの排水経路上にあることから、門の雨落ち溝としての機能だけでなく、裏中門からの排水を受け、下流へ送る排水路の役割も兼ねていると推測されます。

調査区４、５（裏下門下雁木）

調査区４では、豊島石製暗渠排水溝を確認しました。溝は、下流に向かうにつれやや北に曲がっています。また、雁木の上半部では、蓋のある状態でみつかりましたが、雁木下段では溝底のみの状態でした。

雁木の基底部については、後世の改変等を受けていたため、江戸期の状況は明確にできませんでした。

写真５　調査区３東半部（南東から）
青線が江戸期の水路。青線の対面にある石列は現在の水路。

写真６　調査区３西半部（南から）
青枠部分が裏下門の雨落ち溝。

写真７　調査区４、５全景（東から）
青線部分が豊島石製排水溝の北側面。

写真８　調査区４西壁（西から）
青線より上が後世の改変部分。

調査区６（肘櫓東）

肘櫓の東側に設定した調査区です。現在は斜面になっていますが、絵図から、この場所には雁木があり、その上に土塀があったことがわかります（図２、３）。また調査区北端の裏下門枡形南石垣面には、裏下門枡形内にある木製枡へ排水する排水吐口が開口しています（写真９の黄色矢印）。調査は、土塀の雁木の痕跡や排水経路を確認する目的で行いました。

調査区中央で雁木がみつかりました（写真１、10）。雁木は下から２段目までが確認でき、裏込めの栗石等の状況から、下から３段目以上は後世に抜き取られたと推測されます。雁木最下段の踏面から約３cm下で江戸期の地表面が確認できました。

また、西端の最下段雁木の直下からは石組みの水路がみつかりました。水路は両側壁と天井が石組みで、床面は地山を削り出し、部分的に平らな川原石を敷いています。写真１にみられるように、水路内は多くの土砂が堆積していましたが、石垣排水吐口まで続いていることが確認できました。

石組み水路の南では、石組み水路につながる集水枡がみつかりました。枡は地山を掘りくぼめ、表面が平らな川原石で不陸を整えた上に置かれていたようです。埋土中から鉄釘が多く出土していることから、枡は木製であったと推定されます。南西隅の壁では、豊島石製暗渠排水溝がみつかったため（写真11の黄色矢印）、枡はこの溝からの水を受け、石組み水路へ排水していたと考えられます。

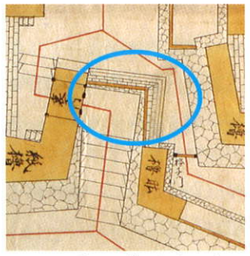

図２　絵図に描かれた雁木の表記（青丸部分）

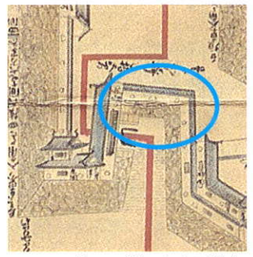

図３　絵図に描かれた肘櫓東側の土塀（青丸部分）

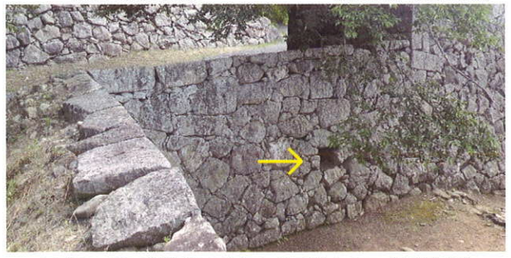

写真９　裏下門枡形南石垣面にある排水吐口（北東から）

写真 10　調査区６全景（南から）

写真 11　調査区６枡完掘状況と豊島石製排水溝（北から）

調査区７

現在の地表面よりも約 40 cm低い位置で、江戸期の地表面を確認しました（写真 12 橙色の面）。石垣基礎の状況は、西面石垣と北面石垣で少し異なります。西面石垣では、地山（写真 12 の黄色の面）の上に直接石垣最下段の石（根石といいます）が据えられています。一方北面石垣では、東端の根石は地山直上に据えられていますが、それより西の根石は地山を掘り込んで据えられている（これを掘込地業といいます）ことがわかりました。

写真 12　調査区７全景（北から）
北面石垣の掘込地業では、地山を掘りこんで石を据え、地山と据えた石との間には、栗石が充填されている。